

ここだけの模様や色づかい。
もっと身近に、気軽に
ガラスを使ってもらえるように。



「ガラスは手にとって、たくさんたくさん使って欲しい。割れてしまっても、また新しいのを探す楽しさもあるから」。

“いいもの”というイメージのある手仕事のガラスは、特別な時にだけ使っている人も多い。でも、毎日使うものとして愛用してもらえることが、つくり手の喜びにつながっているという。彼女が主につくるのは、カラフルな色づかいの箸置きや、手のひら程のまんまるな一輪挿しなど。どれも心なむ雰囲気、若い女性にも人気が高い。柄の組み合わせや色づかいなど、細やかで繊細な仕事には女性ならではの感性が光っていて、思わず手に取りたくなる愛らしさがある。

他の誰にもつくれない、彼女ならではの表現力だ。「いつの間にか続いていた」というガラス職人としての人生。「多分自分に合っていたのだろう」と笑う彼女もいまでは二児の母。家ではもちろん家族もまたそれぞれに毎日使う愛用のガラス製品がある。

